

霊的避難所としての政党：フランス人民党のド リュ・ラ・ロシエル

松尾, 剛
立命館大学法学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/2203062>

出版情報：Stella. 37, pp.233-248, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

靈的避難所としての政党

——フランス人民党のドリュ・ラ・ロシエル——

松 尾 剛

政治との関わりを抜きにして兩次大戦間のフランス文学を語ることは難しい。この時代を生きた多くの作家たちは、それが己の職業的使命とばかりに、立場の左右はあれど、積極的に政治的な発言を行ったのである。ブルトン、アラゴン、マルロー、セレーヌ、ニザン……。ドリュ・ラ・ロシエルもまた、そのなかの一人であることは論を俟たない。1922年にグラッセ社から『フランスの測定』を刊行して以降、矢継ぎ早に『若きヨーロッパ人』『ジュネーヴかモスクワか』『祖国に抗してヨーロッパを』等の政治評論を刊行していたドリュは、ついに34年、その名も『ファシスト社会主義』なる書を世に問うことで、おのれの依って立つところがデモクラシーと資本主義の否定であることを、明らかにしたのである。

とはいえこの時点のドリュは、ファシストの旗印を掲げながらも、その思想を実践に移したわけではなかった。観照的な姿勢から抜け出して、具体的に行動するドリュを見るには、フランス人民党への参加を待たねばならない。1936年、サン＝ドニ市長のジャック・ドリオは、反コミニズムの大義を掲げて新党を結成した。かつては共産党希望の星であったこの政治家の下に、ドリュ・ラ・ロシエルもまた馳せ参じたのである。そしてその後は党の中央委員会メンバーとして、機関誌『国民解放』に健筆を振るうことになる。

それらの記事をまとめて一冊の書としたのが『ドリオと共に』（1937）である。『ファシスト社会主義』が、政治的立場を明確にしつつも、あくまで理論的な領域に留まった〈思想書〉であるのに対し、作家自ら筆を執り、党の宣伝に努めた論の集積たる本書は、いわば実践の記録と言えよう。したがって、ドリュのアンガージュマンを考えようとする向きには、必要にして不可欠の資料体となっている。

しかしながら作家の政治思想を検討するに際して、『ドリオと共に』の言説を分析したものは意外に少ない。『ファシスト社会主義』からドリユの政治的イデオロギーを抽出しても、『国民解放』掲載の記事から、ドリユが現実の政治といかなる関係を結んだのかについて考察することは、ほとんどなされていないのが現状である。だがそれも無理からぬことで、党の機関誌で作家が倦まず弛まず繰り返すのは、コミニズムとソビエトに対する批判であり、人民戦線とレオン・ブルムに対する憎悪である。フランス右翼の口寄せと化したドリユの論調は退屈の極みで、真面目に取りあげることすら憚られる代物だ。

とはいえ、いかに陳腐であろうとも、それもまた小説家の言説である以上、黙殺を決め込むのは、かならずしも適切ではあるまい。なるほど党を理想化し、リーダーを称賛するドリユの筆は、凡庸な政治的プロパガンダにすぎない。しかしできるだけ多くの読者の琴線に触れるべく、野卑な口調と単純な論理を駆使するドリユの論説は、ためらいや逆説に満ちたそれまでの政治評論とは異なり、作家がドリオ運動に託した夢を、かえって明確に表出しているのである。そこで本篇では、党機関誌に掲載されたドリユの言説を仔細に検討することで、両次大戦間のフランス社会にたいする作家の姿勢と、彼がフランス人民党に賭けた希望を明らかにしたい¹⁾。

孤児としての国民

ドリユが入党したフランス人民党は、ジャック・ドリオという強烈な個性を牽引力とした政党であることから、当然ながら、作家もまたそのカリスマ性を強調すべく、スポークスマンよろしく党首に賛辞を捧げつづける。よく知られた一節ながら、人民党员としてのドリユの口吻を再確認するためにも、作家によるドリオ像を引用しておこう――

ドリオは力強い巨漢である。ひどく汗をかく。残念なことに眼鏡をかけてはいるが、しかし、それを外したとき、彼には物が見えていることに、人は気付く。

豊かな頭髪。豊富で力強い実体の只中にいる。彼は健康だ。大声で演説しながらも、冒頭より最後の方が上手く話していることから、それと分かる。

彼を見れば、まだフランスにも、状況を支配できる屈強な男たちがいると人は思う。

[AD, 20]

まさに聖人伝と呼ぶに相応しい叙述であるが、フレデリック・ソマドも指摘するように、あまりに大仰で読者の失笑を誘いかねず、この肖像画を真面目に受けとる読者がいたとは信じがたい²⁾。とはいえこの精力的な指導像に、作家の理想の一端が込められていることも、また事実であろう。

しかしそれ以上に注目には値するのは、ドリオが繰り返し父として語られることではあるまいか。じじつ、ドリオを精悍な指導者として描いた文章は結党時の数編にすぎないが、父親としてのドリオ像は、脱党の39年に到るまでの記事で幾度となく繰り返されている。試みに入党から約半年後の37年2月に発表された「人民は我らと共にあり」の一節を引用しよう——

しかし、その晩、^{ヴェル・デイヴ}冬季競輪場には、明白な現実満たされた群衆の前に、ひとりの男がいた。ジャック・ドリオである。彼は父親のように振る舞い、父性的で、非常に人間的な役割を効果的に演じていた。この役割こそが、指導者——政府の指導者——の役割であるべきなのだ。[AD, 146]

ここで述べられるのは、ドリオの父性的資質だけではない。指導者たる者、すべからく父たるべし、とするドリユの思想である。じじつ、同年5月の「若者の救済」は、次の一文で締めくくられるだろう——「指導者とは、何よりもまず、父である」³⁾。この思想は政敵を批判する際の視座ともなる。つまり、父親的に行動できない者は、政府の指導者たりえないと判断されるのだ。したがって人民戦線の首班である「ブルム氏は、フランス人青年にとつて、父親ではない」[AD, 127-128]。

参考までに付言すれば、ドリユは父たる指導者と対をなす母も想定していた。指導者が夫婦のように連れ添うべき存在、それは祖国である——「スペインでは、彼らは祖国とは何であるかを理解したのだ。それが万人の求める母であることを、彼らは理解したのだ。すべての人間は母を、これだけの大きさをもった母を必要としているのである」[AD, 145]。「このあらゆる国家における女性的な優しさに対応する男性的要素が、父であり、政府であり、政府の指導者である」[AD, 146]。しばしば引用される以下の一節は、この文脈から理解されるべきではあるまいか——

ドリオは良きアスリートであり、フランスを前にして、急進党のパイプを吹かしな

がら、彼の〈病める母〉を見つめている前世紀の太鼓腹の太ったインテリではない。彼はその衰弱した体を抱きしめ、自分のなかに満ちている健康を、彼女に吹き込むアスリートなのだ。[CP, 54]

一見すると、近親相姦的なイメージに満ちた肖像画に思えるが、そうではない。ドリユが連想していたのは、むしろ病気の妻を介護する夫の姿であろう。このことは、人民党時代のドリユを考えるに当たって、存外軽視できない。同党に加入した1936年、彼が『夢見るブルジョワジー』の執筆に勤しんでいたことを想起しよう。いうまでもなく、同書は不仲であった作家の両親をモデルに、陰鬱に没落していくブルジョワ一家を描いた作品である。これと対照を成すかのように、政治論のドリユは、相愛の夫婦像を指導者と祖国に投影して描いている。換言すれば、文学作品では家庭の悲惨を描きながら、社会を論じる際には、家庭の幸福を夢見ていたと思われるのだ。とすると、かくまで指導者を父として称揚するドリユは、社会的落伍者のまま34年に死亡した実父エマニュエルに替わりうる人物を求めていたとも考えられよう。

閑話休題。話をドリユのプロバガンダに戻そう。彼によれば、指導者とは父なる存在であった。であれば、彼に付き従う党员や国民は、父にとっての息子に当たると考えてよいのか。ドリユの返答は微妙に異なる。指導者の支配下にある者、それは血縁で結びついた息子ではなく、生みの親に見捨てられた子供、孤児なのだ――

フランス人よ、匿名と政府の悲惨な無責任の只中に、身を守る物も称号もなく打ち捨てられた孤児たちよ。君らはひとりの父を見出したのだ。⁴⁾

じつを言えば、フランス人を孤児とする比喩は、ドリユの記事に頻出する。次の引用は、現代人が都会の娯楽に気を散じようとも、かつて存在した（とドリユが信じる）家庭の温もりには、遠く及ばないと述べた一節である――

かつての彼らには神があり、兎のように子を成した。それはおそらく、ポケットにわずかな給料を入れ、自分のことしか気かけぬ、じつに嘆かわしい自由を手にして、大都会の街路に消え去ってしまうよりは、彼らの心を熱くしただろう。

いつもひどく孤立し、ひどく孤児となった哀れでちっぽけな人間よ。[AD, 113-114]

この種の表現は枚挙に遑なく、作家自身も「大都会に生きる現代人は孤児であると、私はしばしば書いてきた」⁵⁾と述べるほどである。一例として、38年1月の「若者への手紙」から引用しておこう――

フランスの若者は孤児である。彼らは父を持たない。全国民も同様である。フランス国民に必要なこと、今すぐ、最初に必要なこと、それは父を、すなわち政府を作ることだ。⁶⁾

本節を終えるにあたって、ドリユの主張を纏めれば、自分を遺棄された孤児と感じるフランス国民にとって、必要とされているのは父性的な存在であり、政権を司る指導者こそが国民の父である、ということになる。それならば、いかなる意味で国民は孤児なのか。別言すれば、なぜフランス人は孤児たらざるをえないのか。次節では、この問題について検討を加えよう。

雇用主という似非指導者

両次大戦間のフランス人が孤児同然である理由を、ドリユは、経済面と政治面から説明する。人民を寄る辺なき存在にしているもの、彼によれば、それは経済的には資本主義、政治的には民主主義である――

私たちは、肩のうえに二重の軛を絡みつけるふたつの制度を、同時に生きている。すなわち、資本主義体制と民主主義体制である。その結果、私たちは半ば孤児のように暮らしている。雇用主だろうが政治屋だろうが、公の指導者たちは、我らにとっての父ではない。[AD, 111]

社会主義者にしてファシストたることを公言するドリユであってみれば、資本主義と民主主義を敵視することに不思議はない。だが、なにゆえ現体制下では、フランス人は孤児たらざるをえないのか。ドリユの回答は明確だ。現代人が家なき子であるのは、政治経済の両面を支配する上層ブルジョワジーが、統治者に必須の資質である責任感を欠いているからにほかならない――

その結果はどうだ？ 結果は？ 国民の魂にどんな結果を招来したのか？ それは絶えざる不快であり、嫌悪感であり、意気喪失である。特権とは責任感によって正当化されるであろうに、まったくそうはなっていないのだ。

特権はいかなる責任感によっても支えられていない。というのも、ブルジョワたち

には、政治的な責任感も経済的な責任感もないからだ。これこそが真に重大な点であり、民主主義的にして資本主義的なフランス社会の緩慢な崩壊は、ここから生じているのである。[AD, 166]

だとしたら、なにゆえ現代の資本家は、被雇用者に対して無責任なのか。それは、大資本による企業体では、経営者と労働者の距離が遠すぎて、人間的な接触が不可能だからである——

株式会社の管理者も、私生活においては、しばしば立派な人間でありうる。しかし管理と技術の全機構が原因となって、他のネジから孤立した一本のネジのごとくに、彼はサラリーマンや労働者から遠く離れている。

そしてたとえ雇用者が一人の人間だとしても、事業は大きすぎて、個々の社員と知り合うことはできない。たとえ小規模の事業であっても、社員たちの心に通う道などもはや分からぬほどに、習慣化しているのだ。[AD, 112]

そしてドリユはこう嗟嘆する——「人々が一生涯を、同じ企業内で共に働きながら、直接的で個人的な、愛情ある関係を絶対に結ばないことを思うと恐ろしい」[idem]。

このような対人関係の距離からは匿名性が生じ、雇用者には社員一人ひとりの名を知る術はない。他方で働き手も雇い主の名を知らない。否、知りようがないのだ。なぜなら、それは匿名の存在なのだから——

現代における雇用主とは何か？ ほとんどの場合、それは人間ではない。それは株式会社 (une société anonyme) である。[idem]

株式会社というフランス語は、名前のない会社、もしくは見知らぬ人々から成る社会とも訳しうる。上の引用は、明らかにこの二重性を踏まえている。じっさい匿名性という現象は、ドリユの論説において繰り返し問題にされる。たとえば、少年犯罪者の裁判を傍聴するドリユは、生きるのに不器用な被告が失業者となったことに触れ、「匿名性を主たる要素とする我らの制度は、これら臆病者を支え、守り、助言できるようないかなる組織も持たない」と述べるのである⁷⁾。

ここでドリユの資本主義批判を要約すれば、現代の巨大化した企業体では、資本家と労働者は互いに名も知らぬ存在と成り、その距離感が雇用者から責任

感を奪い、労働者を孤児同然の存在たらしめる、ということになろう。じじつ、37年11月の記事でも、大集会に埋没した個人を例に取り、「彼は自分の責任を、そこでは自覚できない。すぐ側の隣人に対して、あまりにも無縁なのだ」⁸⁾と述べている。作家のなかで、人間疎外と無責任性が強く結びついていることは、もはや明白であろう。そして、互いに名も知らぬ者たちの共生という世界像こそが、作家の第3共和制批判の基底を成しているのである。そこで次節では、ドリユ・ラ・ロシエルの政治論を見てみよう。

真の指導者の方へ

匿名性に隠れて責任を放棄し、部下を見捨てる雇用主——これがドリユの嫌悪する資本家像であった。とするとドリユの理想とするリーダーは、経済面であれ、政治面であれ、個人名を有した責任感溢れる人物ということになろう。じっさい、彼によれば、フランス人民党も「指導者たちが、もはや匿名の人物ではなく、人間から逃亡し、人間たちも逃亡するような存在ではないことを望んでいる」[AD, 114] という。言い換えれば、ドリオ主義者にとっての政治家とは、匿名性を良いことに国民の前から逃亡する人間ということだ。だからこそ「我々は責任を取る人々を、全責任を引き受ける人々を好むのだ」[AD, 192]。この責任感に満ちた人物こそが人民党の党首ということになるのだが、では、なぜ現代の政治家は匿名にして無責任なのか。なるほど財界における指導者については、事業の巨大さゆえに労働者との人間的な絆を喪失しているとの指摘を、とりあえずは首肯してもよい。しかし投票で選ばれる政治家までもが、なにゆえ匿名の存在と指弾されねばならないのか。その原因としてドリユが挙げるのが、名簿式投票制と比例代表制である。

只野雅人によれば、第3共和制の選挙方法は単記式投票制と名簿式投票制との間で揺れ動いていた（比例代表制は、名簿式投票制の一種）。政治家や政党の様々な思惑を巻き込みながら、それでも第3共和制下のフランスは、基本的には単記式投票制を維持することになった。じじつ第3共和制下の選挙改革では、1885年および1919年の二度にわたって名簿式投票制が採用されているが、それぞれ89年と27年に単記式投票制に戻されている。つまり人民党員時代のドリユが直面していた選挙方法とは、単記式投票制だったのである⁹⁾。

ドリユはこの制度を支持していた（「私は一回限りでの単記式投票制に賛成す

る」[CP, 19])。それというのも、名簿式投票制で選挙を実施した場合、当然ながら、選挙人は個々の政治家に票を投じることができない。いきおい投票者は選出結果に責任を感じる事が難しく、他方、自らの個性で当選したわけでもない代議士が、有権者に対し責任を感じるはずもない、それがドリユの考えであった——

もし代表制の、普通選挙の原理を破壊したければ、比例代表制を実施すればよい。それは選挙人、被選挙人双方の個別性と責任感を粉碎し、政党間の機械的調整に利するべく、あらゆる人間的な接触を消滅せしめる。[CP, 19-20]

ここに描かれた有権者と政治家の関係は、先に論じた資本家と労働者のそれと同一である。巨大企業において、雇用者と被雇用者が接触を欠き、互いに匿名であるがゆえに、相手の運命に無責任であるように、比例代表制に基づき、誰が選出されるのかも定かならぬままに票を投ずる選挙人と、政党の得票数にしたがって議席を配分された議員との隔たりは大きく、政治家は有権者に対し無責任たらざるをえない。じじつドリユは述べる——

どうして現代人は、これほどの距離感に、これほどの孤独に耐えられるのか？ これは工場や会社だけのことではない。政治の世界でもそうだ。

書記長と組合員、代議士と有権者の関係は、工場長と労働者以上に、現実的だろうか？ 我らにそんなことを信じさせようという者がいたならば、そいつは腹黒い嘘つきだ。[AD, 112]

とはいえ、これだけならば、ドリユの懸念は杞憂と笑い飛ばされたであろう。なるほど、比例代表制の実現を模索する第3共和制を前にして、彼が苛立っていたであろうことは想像に難くない。しかしながら前述のごとく、人民党時代の彼が目にしていたのは、単記式投票制であった。したがって比例代表制による人間関係の破壊とはドリユの空想にすぎない。

そこで作家の矛先は、普通選挙そのものへとむかうことになる。彼の主張に従えば、普通選挙によりすべての投票が同じ価値を持つことで、個人の票は重みを失い、いわば誰の物でもない一票へと変質してしまう。任意の投票者は匿名の存在となるがゆえに、立候補者も個々人の状況や要求に関心を持ちえない——「我々の修理工は一人の代議士に投票するとき、彼に重みを与えている専

門領域での長所と知識を失っている。不条理にも彼は片隅の清掃人や銀行家と混同され、後者は後者で、自分の存在理由を失ってしまうのだ」[AD, 119]。

かくしてフランス国民が、政治的にも経済的にも孤児である理由が明らかになる。ドリユの見るところ、政財いずれの世界においても、現代社会は人間相互の繋がりを断たれている。とりわけ、各界の指導者たちとそれに付き従うその他大勢との関係がそうだ。疎遠であるがゆえに、両者は互いの個性を識別できず、したがって責任感など望むべくもない――

我々の民主主義的にして資本主義的文明では、人々に対する指導者の責任は分有されている。そうすることで責任は、実質的には溶解・消失しているのだ。雇用主と議員と組合指導者との間で分有されている。それぞれが自分の責任を、相手に押しつけているのである。[AD, 167]

そうであればこそ、ドリユの待望する指導者は、無責任な現代の指導者たちと対照を成さねばならない。政治面でも経済面でも、配下の男たちに対して雄々しく責任を取る指導者でなければならないのだ。「望まずして、ある組織の〈代表者〉となっていると答えるのは卑怯である。自分が責任を負っていることを自覚せねばならない」[AD, 181]。責任感に溢れた指導者、そのような人物をリーダーとした時、「政治的責任と経済的責任が和解し、互いを豊かにするような社会」[AD, 168] を創造できるだろう。

ドリユによれば、「200年来、議会の議論と討論のなかで、責任感が、向きの定まらぬ選挙の風に絶えず吹き上げられ、まき散らされ、拡散していくことで、この〔指導者という〕概念も失われてしまった」¹⁰⁾。「この概念を喪失したがために、次第に自らを孤児とを感じるようになった世界」¹¹⁾ に、指導者への希望を取り戻さねばならない。20世紀とは、畢竟この観念を再発見する時代なのだ。作家にとって、それに相応しい人物がジャック・ドリオであったことは、言うまでもない――

もし我らにジャック・ドリオありとすれば、それは多くのフランス人が、迷子になって、戦前も戦中も戦後も、あちこちと探し求めて、戦ったからである。彼らはついに報われたのだ。¹²⁾

ここでドリユの思惟を整理しておこう――現代社会では人間相互の結びつき

が薄く、それがゆえに指導者たるべき者も、配下に対する責任感を持っていない。企業における経営者然り、国家における政治家然り。このような状況がフランス国民に、自分が親に見捨てられた孤児であるとの想いを強くさせている。待ち望まれるのは父なる指導者であり、ジャック・ドリオはその座に相応しい存在である……。

以上がフランス人民党党首を称えるドリユ・ラ・ロシエルの主張であるが、しかし、彼の思想は指導者への憧憬に留まらず、政治による精神の救済へと射程を拡げてゆく。その過程でドリユは、コレージュ・ド・ソシオロジーと出会うだろう。次節では、ドリユの夢見た政党のあるべき姿について検討することで、彼の思い描いた政党が政争の道具に留まらず、霊的救済装置としての意味を有したことを明らかにしたい。

霊的避難所としての政党

ドリユにとっての政党とは何であったか、それをよく理解させてくれるのが、37年9月の「言葉に溺れないフランス人の政党を創造する」である。現代社会において、「政党という概念は途方もないほど拡張している。政党は精神の場となっている」[CP, 68]。そこに集うのは、志を同じくする活動家だけではない。孤児、崩壊しつつある家族、故郷喪失者、奴隷のような労働者、さらには自分が身を捧げるべき目標を見失ったすべての男女が集うのである——

道徳と知性が根底的に乱れ、家族・宗教・労働の自然な環境のなかで生きる人々が、絆の深刻な解体に見舞われ、多くは無数の個体 (une poussière d'individu) となって、錯乱した〈精神〉のなすがままに街を彷徨っている以上、彼らが立ち直り再生するための唯一の手段は政党である。新しい国家を待つ間、人々に政党という避難所を与えなければならない。[idem]

これはもはや通常の意味での政党ではない。ドリユも認めるように、一種の宗教と言えらるだろう——「種々の宗教と共に、かつてのフリーメイソンがそうであったような宗教の代用品も輝きを失った以上、カトリック教会とロッジが果たしていた役割を、政党が請け負うことになる。政党は政治面のみならず、精神面にも拡がりを見せている」[CP, 69]。じつのところ、絆を喪失した個々人の再結集を夢見るドリユの思考は、結党からの妄執でさえあった。上記論説文

の前年、すなわち36年8月発表の「サン＝ドニに通じる3つの勝利」において、マルセイユでの人民党集会を活写するドリユは、先の引用と類似した語彙を使用して、孤独の危険を喚起し、連帯を呼びかけていた――

君たちは家に隠れ、ちっぽけな個人の生活と歴史に埋もれて暮らしすぎた。共にいること、皆と一緒にいることがどういうことか、分からなくなっているのだ。

人間を神経質で、疑り深く、冷笑的な無数の個体 (une poussière d'individus)へと変えてしまう大都会の生活のせいで、君たちのなかにある、人種固有のきわめて麗しく名高い長所も、衰弱してしまった。

かつて、異邦の人間たちが賛嘆したあの陽気さ、あのくつろぎ、あの率直さはどこにいったのだ？ [AD, 41]

そして「街路に繰り出し、ちっぽけな個人の生活から生じるつまらぬ鎖を打ち砕き、巨大な交わり (de grandes communions) に身を浸していた」[idem] 諸外国の人々、とりわけ「ひとつの巨大な美しい人格」[idem]と化し、踊りに興じていた独伊の国民に賛嘆するドリユは、同様の行為をフランス人にも促すのである――

歌いたまえ、叫びたまえ、動きたまえ、両の腕を解きたまえ。聖霊 (le saint Esprit) を呼びたまえ。さすれば聖霊も、君たちのなかに降臨しよう。自分たちが、大聖堂を、集団の飛躍と一糸乱れぬ信仰を示すあれらの建造物を、ヨーロッパに与えた民族なのだという自覚を持ちたまえ。[idem]

宗教的イメージの横溢する文脈に鑑みれば、前頁で引用した「精神の場 le lieu spirituel」は「霊地」、「錯乱した〈精神〉l'Esprit égaré」は「道に迷った聖霊」とでも訳すべきか。とまれドリユの夢想する政党が、孤独な現代人が身を寄せ合い、失った絆を取り戻すための場であることは明らかだ。

しかし、それでも疑問は残る。政党に集う人々が、同一目的を持って行動することで、連帯感を持ちうるとしても、なぜ救済手段を政党に限定せねばならないのか。別言すれば、政党の何が黨員間に人間的紐帯を生じせしめるのか。ドリユによれば、それは盟約である。誓いの言葉こそが現代人の信頼関係を取り戻す手段なのだ。党加入は政党への忠誠を前提とする。入党時の誓約を守り、守らせることで、黨員間の信頼が確立されると、ドリユは述べる――

まず何よりも、ひとつの道徳的規律を与えよう。試練無きところに道徳無し。党への忠誠は人間の人間に対する道徳的信頼を試し、強くする。現代において、政党は構成員に、深く全面的な加入と、生命を賭けた誓い (un engagement vital) を要求するのである。[CP, 69]

いまやドリユにとっての政党は「寄る辺なく離散した人々に、ひとつの道徳的規律、一群の思想、ひとつの哲学的目標を与える」[idem] ものとなった。そして、このような政治的共同体の夢を通じて、ドリユはコレージュ・ド・ソシオロジーに接近することになる¹³⁾。

バタイユ等の試みに着目するドリユは、彼らの主張から「人間がもはや個人では生きられぬこと、思考し行動する集団のなかで、他者と一体にならねばならぬこと、そしてはるかに重要なことに、この思考と行動が人間の魂を解放する価値を持つのは、メンバーを日々結び付けている振る舞いに、絶対的にして魔術的・儀礼的な価値を、集団が認める時だけであること」¹⁴⁾を学ぶ。そして「政治とはいかなる関わりも持たぬ若き哲学者たちが、[...] それと知らずに、我らの党の霊的現実を描いていることに驚きを覚えている」¹⁵⁾。というのもドリユの理解によれば、バタイユらが求める新たなる紐帯とは、政治の領域においては、あの「誓い」にほかならないからだ――

我ら人民党の人間にはよく分かっている。我々の間でのじつに深遠な誓い (un engagement très profond), 内奥に秘められた誓い (un engagement intime, secret) 無しには、何事もなしえないのだ。それこそが、フランス人の中で結ばれる、古びて役に立たなくなった、すべての契約に取って代わるものなのである。¹⁶⁾

もちろん社会的なものに対するドリユの理解は、到底コレージュ・ド・ソシオロジーに集った思想家たちの射程には及ぶまい。しかし彼の社会学研究会評を読めば、フランス人民党機関誌に作家が書き散らした夢想、すなわち人間の共同体の再生といういささか凡庸な理想が、しかし単なる政治的プロパガンダではなく、政論家ドリユにまとりついた見果てぬ夢であったことを確信できるのである。

結 語

本稿はフランス人民党期のドリユが物した論説文を読むことで、作家が政治

参加に賭けた夢を再構成する試みであった。その結果、ドリユにとっての政党とは、入党時の誓約を通して失われた人間的絆を回復する場、孤独な現代人に共生の場を与える霊的避難所であることが明らかになった。

しかし『ドリオと共に』や『政治評論集』を読むことの意味は、これに尽きるものではない。というのも、第3共和制下の社会と政治を語調も激しく批判する一方、フランス人民党の意義を声高に喧伝するドリユの筆法からは、表象をめぐる思想が垣間見られるからである。

たとえば、「集会で一緒になったのなら、見つめ合いたまえ、声を掛け合いたまえ。自分のことを、見物に来て去っていくような、孤立した無責任な個人と考えるのを止めよ」[AD, 42]との文言は、表象を介さぬ直接性を求めるドリユを示してはいないだろうか。「具体的ならざる物や、手で触れ得ない物は、フランスとは何の関わりもない」[AD, 182]と述べる時、書き手は表象に欺かれぬ直接知覚を憧憬するロビンソンを想起していたはずだ¹⁷⁾。翻って、代議制 (le principe de la représentation), 比例代表制 (la représentation proportionnelle), 代議員や代表者 (les représentants) に対して、飽かず繰り返される批判は、表象概念そのものへの批判を射程に収めているのではあるまいか。

じっさい党の機関誌で筆を執りながらも、ドリユが表象をめぐる思考し続けたことは、37年5月の「指導者たること」を読めば一目瞭然だ。というのも『ドリオと共に』の掉尾を飾るこの記事は、鏡を前にした指導者たちの姿をもって締めくくられるからである――

私が語っているこの男は、夜中に起き上がり、鏡に自分を映して […] ただ単に、こう問わねばならない。「私は真のフランス人だろうか？ 他のどんなフランス人のなかにも自分の姿を認めて安心する良きフランス人だろうか？ […]」

今日のフランスで、ベッドから鏡までのこの恐ろしい旅に傷つかぬ男とは、どんな者であろうか？ [AD, 210]

鏡を見つめるこの男の側に、同じく指導者を自任するもうひとりの男がやって来て、こう囁く――

「君は私を必要としていないか？ 今宵、鏡のなかに、私の横に君の顔が並んでいるのを見た。

それから、我らの顔は消え去った。残ったのは、待っている人民の巨大な顔だけだっ

た」[AD, 211]

ナルシス神話を持ちだすまでもなく、鏡像は表象の最たるものである。またドリユが鏡に憑かれた小説家であったことも周知の事実である¹⁸⁾。とすれば、『国民解放』に掲載された政治的文書が、表象概念と無関係であるとはいよいよ考えにくい。本稿で垣間見た政治的・経済的代表者への批判が、表象をめぐる思考といかなる関係を持つのか、これについては稿を改めて論じることとし、ひとまず擱筆としたい。

註

- 1) 本稿が参照するドリユの論説文については、それらを収載した単行書『ドリオと共に』および『政治評論集』から引用する (Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Avec Doriot*, Paris : Gallimard, 1937 ; id., *Chronique politique 1934-1942*, Paris : Gallimard, 1943)。引用末尾の [] に書名の略号 (それぞれ AD / CP) と共に頁数を記して、参照箇所を示す。また両者に再録されることのない記事については、以下の単行書から引用し、発表時のタイトルと掲載誌名、号数、発行年月日、および単行書の頁数を註記する—— Pierre DRIEU LA ROCHELLE, *Drieu en Kiosque*, vol. 5, Lanrelas : Comptoir des Éditeurs, 2017。なお引用文中の強調は、すべてドリユ本人によるものである。
- 2) Voir Frédéric SAUMADE, *Drieu la Rochelle, l'homme en désordre*, Paris : Berg International Éditeurs, 2003, p. 100。ちなみに「聖人伝」との形容は同書同頁から借用した。なおソマドは人類学者としての視点から『ドリオと共に』を読み解き、いくつかの興味深い論点を引き出している。とりわけ指導者を称える重要な一節に、読者の失笑を誘いかねない文法的なミスが存在する点を指摘し、そこから文体と文法規則の破壊に興じる文学的カーニバルの問題を剔抉した点は称賛に値しよう (voir *idem*)。しかしながら、それでも不満を覚えるのは、文法規則すら踏みこむ暴力的な祝祭を云々するのであれば、なぜ『ドリオと共に』の末尾付近に現れる致命的なミスを取りあげなかったのだろうか。そこでは、フランスが求める「完全なる男 (homme complet)」に不定冠詞の女性形 *une* が添えられているのである [AD, 210]。こちらの方が、よほど傍証となりえたであろう。人民党員時代の論説が、いまだ十分に読まれていないと考える所以である。
- 3) «Le Salut de la jeunesse», *La Liberté*, n° 1, 25 mai 1937, p. 298.
- 4) *Idem*.
- 5) «Ceux qui tremblotent», *L'Émancipation nationale*, n° 50, 12 juin 1937, p. 309.
- 6) «Lettre à la jeunesse», *Je suis partout*, n° 372, 7 janvier 1938, p. 447.

- 7) «Ceux qui tremblotent», *art. cité*, p. 310. なお同記事は老婆をハンマーで撲殺した少年(17歳)の公判傍聴記とされているが、執筆者ドリュは被告を「チビのマドレーヌ (le petit Madeleine)」という仮名で呼んでいる。男子に女性名を付与することは、記事の真実性を著しく削ぎかねず、通常ならば避けられるべきところである。にもかかわらず、あえてこのような手段を用いるところに、ソマドが述べたような、ブルジョワ的礼節を嘲弄する文学的祝祭を見ることも可能であろう。
- 8) «Le Grand bonheur ancestral de se trouver ensemble, entre Français», *L'Émancipation nationale*, n° 71, 5 novembre 1937, p. 402.
- 9) 本段落の記述は、只野雅人「フランス第三共和制下の選挙改革(一)」『一橋研究』第2号, 1990年, 75-99頁, および「同(二)」『一橋研究』第3号, 1990年, 53-64頁によっている。
- 10) «Nous offrons un homme», *L'Émancipation nationale*, n° 91, 26 mars 1938, p. 492.
- 11) «Les Vertus d'un grand parti», *L'Émancipation nationale*, n° 89, 11 mars 1938, p. 487.
- 12) *Idem.*
- 13) ドリュとバタイユの思想上の接近とすれ違いについては、市川崇が詳細に論じている(「シュル・ファシズムとネオ・ソシアリズム——バタイユ, ドリュ——(1)」, 『藝文研究』第101号, 慶應義塾大学藝文学会, 2011年12月, 156-176頁, および「同(2)」, 『藝文研究』第103号, 2012年12月, 150-163頁)。同論は示唆に富むもので、本稿の記述も多くを同論文に負っている。
- 14) «Vers une conception réaliste de l'homme», *L'Émancipation nationale*, n° 108, 22 juillet 1938, p. 559.
- 15) *Ibid.*, p. 560.
- 16) *Idem.* この主張に鑑みれば、『ドリオと共に』の冒頭にフランス人民党誓いの言葉が掲げられているのも宜なるかなである。読者は本論に入る前に、まずは共同体への参入を要請されているのだ。その誓約がなければ、同書を読むことが許可されないかのようでさえある。参考までに、誓いの言葉の全文を訳出しておこう——「私は、人民と祖国の名において、フランス人民党、およびその理想と指導者に、忠誠と献身を誓います。/私は、共産主義と社会的エゴイズムに対する戦いに、すべての力を捧げることを誓います。/私は、自由で独立した新たなフランスが生まれるために、国民と人民の革命の大義に、至高の犠牲を捧げるまで、奉仕することを誓います」[AD, 13]。
- 17) 未完成の遺稿「ロビンソン」における表象と知覚の問題については、拙論「現実と表象の狭間で——ドリュ・ラ・ロシェルにおける鏡像の問題——」, 『ステラ』第33号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2014年12月, 256-258頁を参照されたい。
- 18) ドリュと鏡像の問題については、Jean-Marie PÉRUSAT, *Drieu la Rochelle ou le goût du malentendu*, Francfort-sur-le-Main : Peter Lang, coll. «Europäische Hochschul-

schriften», 1977 が詳細に論じて参考になる。なお本文で言及した、鏡を前にしたふたりの男のエピソードが、ドリオによるド・ラ・ロック大佐への呼びかけを暗示していることについては、すでにアンドルーとグローヴァーが指摘している (voir Pierre ANDREU et Frédéric GROVER, *Drieu la Rochelle*, Paris : Hachette, 1979, pp. 369-370)。当時のドリオは人民戦線に対抗するため、火の十字架団との連携を模索していた。そこでカリスマ的な人気を誇った大佐に、共闘を申し出たのである。この状況に鑑みれば、鏡のなかで溶け合って、フランス人民を形作る 2 人の指導者像は、党首への援護射撃だったと考えられよう。とまれ肝要なのは、そのような源泉を踏まえた上で、鏡に固着するドリユの個人的神話を読み解くことではあるまいか。参考までに付言すれば、ド・ラ・ロック大佐はドリオの呼びかけを拒絶し、ドリオの試みは潰えることになる。